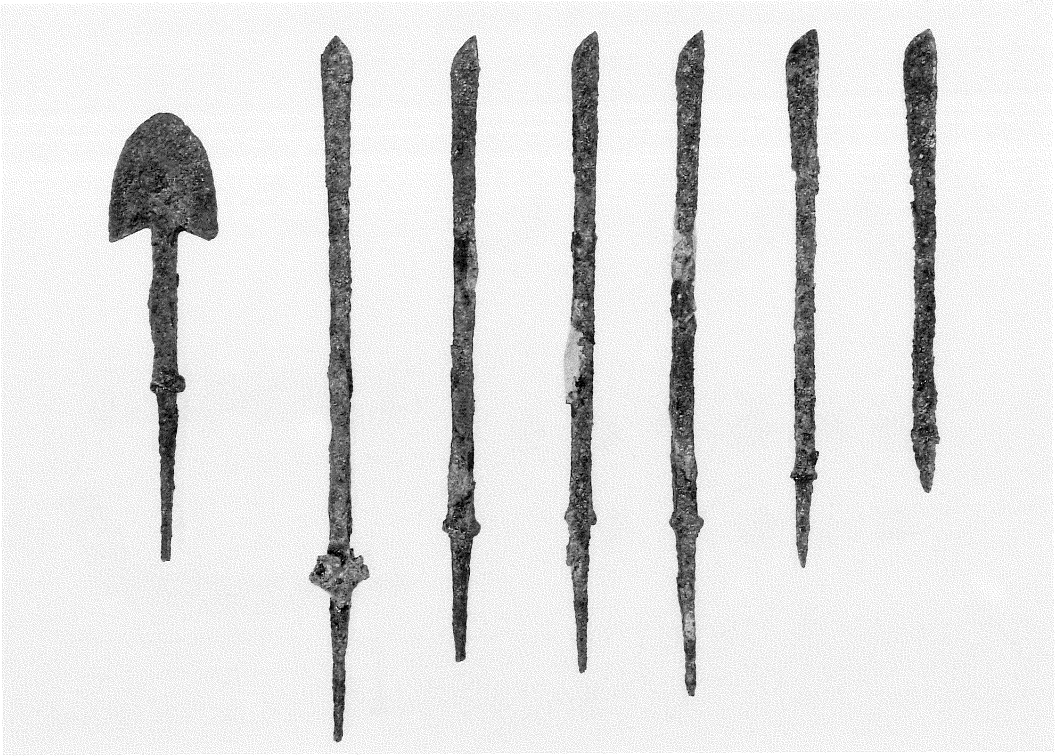
研　究　紀　要

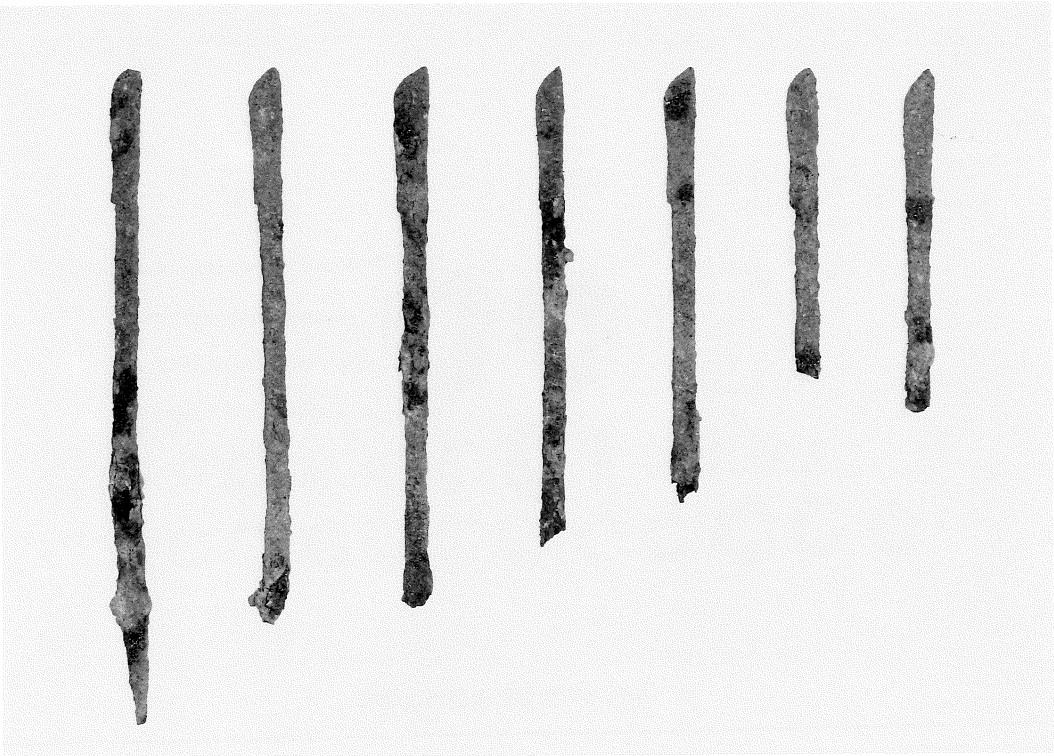
第 10 号

1 9 9 3

財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

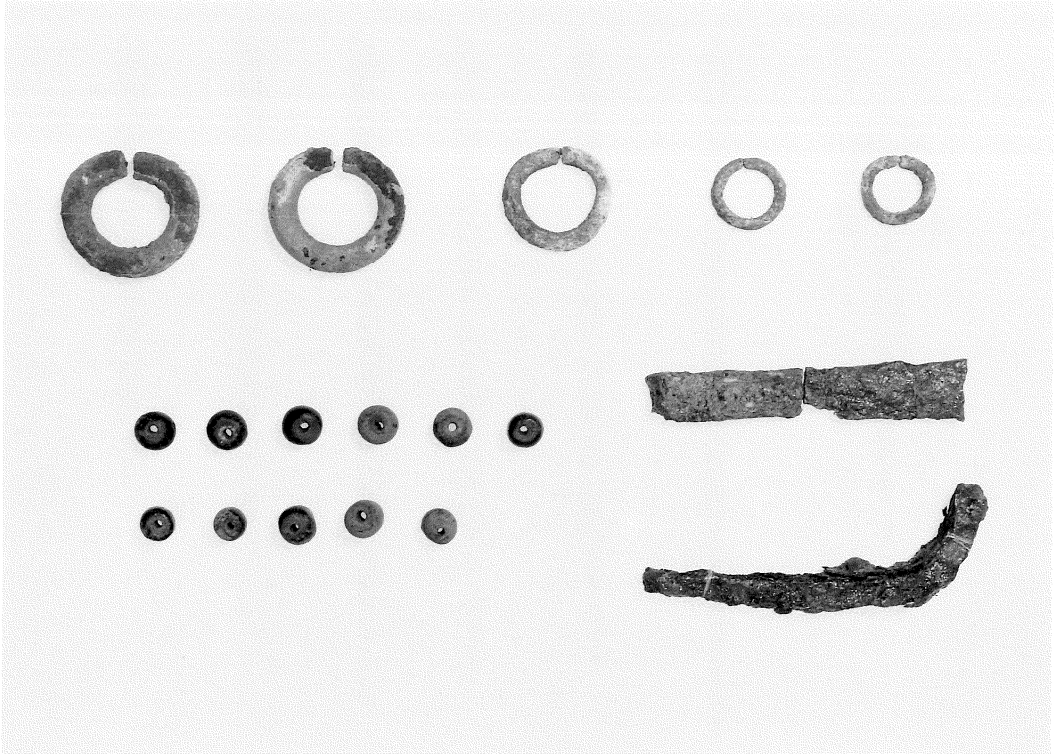


1　毛呂山町川角15号墳　鉄鏃（1）

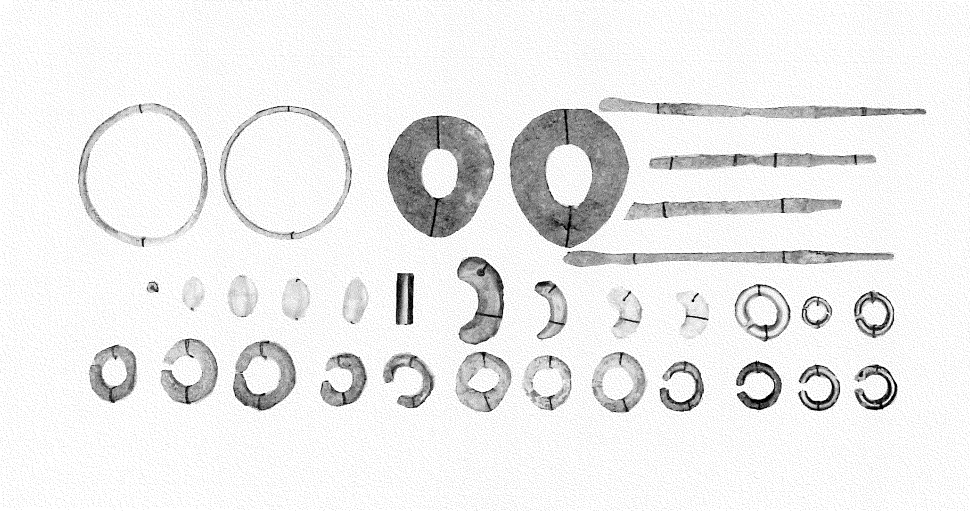


2　毛呂山町川角15号墳　鉄鏃（2）

図版 2



3　毛呂山町川角15号墳　装身具・鉄製品



4　毛呂山町大類古墳群出土遺物

目　　次

序
〈論文〉
子母口式新段階「木の根Ａ式」土器の再検討　金子　直行……(　1)
—細隆起線文土器の出自と系譜を中心として—

羽状縄文系土器の紋様構成（点描）２　黒坂　禎二……(45)

遮光器系土偶についての考察　浜野美代子……(83)

方形周溝墓出土の木製品　野中　仁　福田　聖……(113)

吉ケ谷式集落の展開　石坂　俊郎……(159)

埼玉県域の出現期古墳における土器祭式の様相　山本　靖……(181)

東国における終末期古墳の基礎的研究（２）
田中広明　大谷　徹……(203)

腰帯の一考察　田中広明……(245)

北武蔵の古代通路について　井上尚明……(257)

埼玉県域の出現期古墳における土器祭式の様相

山　本　　靖

要約　関東地方および周辺地域における埴輪祭式受容以前の出現期古墳では、土器を用いた祭式が執り行なわれている。古墳祭祀において、この「土器祭式」は埴輪祭式受容以前の１段階として捉えることができる。埼玉県域における土器祭式は、方形周溝墓と類似する祭式（点）から儀器化された壺形土器が墳丘をめぐる祭式（線）への変遷を辿ることができる。墳丘をめぐる土器祭式からは埴輪祭式との関係が注目される。埴輪祭式は畿内地方において成立したとする見解が近年有力となり、また儀器化された壺形土器は畿内地方に系譜が求められている。これらのことから、古墳出現期における畿内地方と関東地方（埼玉県域）との関連の一端を見ることができる。

は　じ　め　に

関東地方および周辺地域における埴輪祭式の受容は、基本的に前方後円墳の導入に伴って行なわれている（山本1991）。そして埴輪祭式の受容以前には、前方後方墳や円墳・方墳などが出現期の古墳として築造され(註１)、土器の出土が顕著に認められている。これらの土器には、まず埋葬施設内にほかの副葬品と共に副葬されたものがある。これは埋葬儀礼に直接的に伴うものであり、それぞれの土器のみを対照とした研究に留まらず、共伴しているほかの副葬品も併せて考えていく必要がある。次に、埋葬施設以外の墳丘上（古墳外表面）から出土する土器群が普遍的に認められている。これらの土器群は、埋葬施設内から出土する「副葬品としての土器群」とは質的に異なるものである。これらの土器群の存在から、埋葬儀礼には直接的にかかわらない古墳外表面において土器を用いた儀礼が執り行なわれていたことが想定される。このように埴輪祭式の受容以前の古墳祭祀には土器を用いた祭式＝「土器祭式」が古墳祭祀の１要素として重要な役割を担っていたものと考えられる(註２)。言い換えれば、埴輪祭式受容以前の土器祭式は、古墳祭祀における１段階として捉えることができる。

1　土器祭式の類型

古墳出土の土師器については、既に出土状況の分類や土器祭式形態の復元や変遷などの究明が行なわれている。

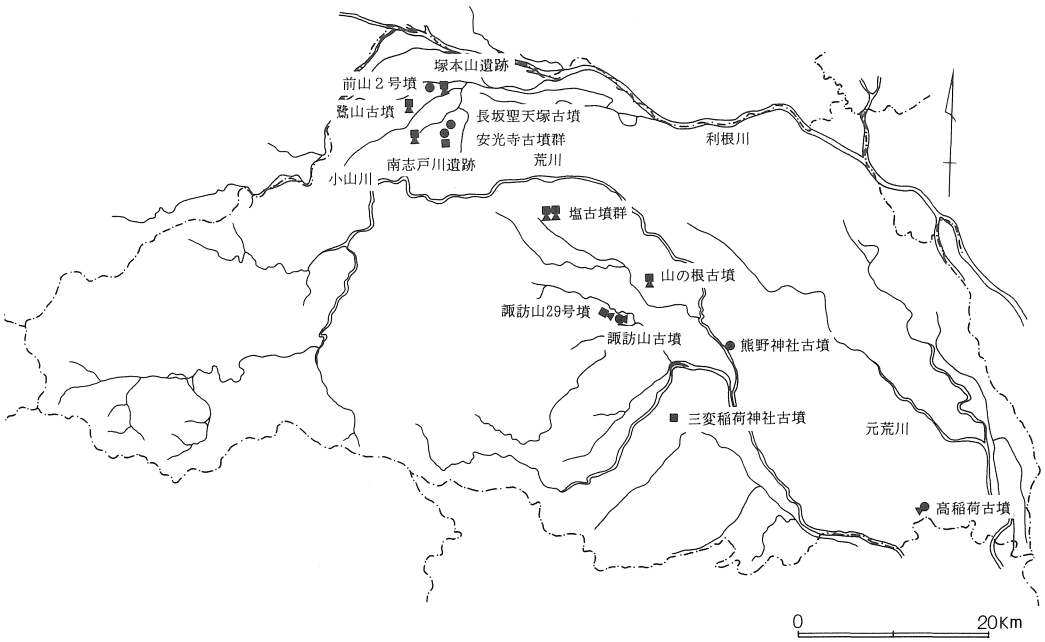
小林三郎は古墳から出土した「土師式土器」をまず「副葬品」と「古墳墳丘における葬礼によって埋置されたと考えられる土器群」に分類し、そして墳丘の土器群を「主体部直上に埋置された土器群」と「儀器化された壺形土器」に細分している。「主体部直上に埋置された土器群」は細片が多く、故意に破砕された可能性が高い。小林は「主体部直上に埋置された土器群」を埋葬の儀礼が完了した段階で埋置されたものとしている。しかし同時期の集落にも存在する高杯形土器・器台形土器・

坩形土器などの器種が主体を占めていることから、古墳への埋置を目的とした土器群ではないと考えている。またこれらの土器群が周溝墓の一部のものと共通する特徴を備えていることも指摘している。一方「儀器化された壺形土器」は、墳頂部周縁付近に存在している。底部が穿孔されていることから、墳墓における埋葬儀礼という目的化された土器＝「儀器」として性格づけている。さらにこれらの土器群の土器型式の検討から、「日常用具の中から供献用土器群が分離、独立し、そのままの形で墓制に参画し、日常用具の中からとくに壺形土器が儀器化し、新しい形で墓制に参加する」という変遷過程を解いている。供献用土器群の墓制への参画を、高杯形土器・器台形土器・坩形土器が一つのセットとして意味をもつ段階と位置づけ、壺形土器の儀器化を本来的には供献用土器ではない壺形土器を儀器化によって補ったものと考えている（小林1972)。

岩崎卓也も小林三郎の論考と相前後して、前期古墳から出土した土師器の出土型式を分類している。まず「埋葬施設内に副葬するもの」と「埋葬施設外におかれたもの」に大別している。さらに「埋葬施設内に副葬するもの」を「通有の大きさの土器であるもの（Ⅰａ型)」と「ミニチュア的な小形土器を副葬するもの（Ⅰｂ型)」に分類している。一方、「埋葬施設外におかれたもの」は「墳頂あるいは埋葬施設上に配されるもの(Ⅱａ型)」（註３)、「墳頂近くの特別な施設に埋納されたもの（Ⅱｂ型)」、「上記以外の墳域内から出土するもの（Ⅱｃ型)」に細分している。Ⅱａ型式の土器は大部分が実用の品で、「多様な器種が組み合わさるもの」と「高杯形土器を置くもの」がある。相対的には前者から後者へ変遷していく。そして大嘗祭の儀礼と比較して、「多様な器種が組み合わさるもの」を単なる死者への供献の具ではなく、「神人共食」の具として考えている（註４)。さらに「高杯形土器」を供献を第一義としたものと考え、「共食→供献」という儀礼の変遷を想定している（岩崎1973)。

塩谷修は小林・岩崎の論考を踏まえて、関東地方における古式古墳の外表面出土土器の出土状況と器種組成に焦点をあて、土器祭式形態の復元・変遷を追求している。

塩谷は出土状況をＡ・Ｂ・Ｃの３類に類型化し、さらに各類型ごとの器種組成を観察している。まずＡ類は埋葬施設上に埋置されたもので、壺形土器・器台形土器・高杯形土器のセット関係を充足するもの（Ａ１類）と、セット関係を充足しないもの（Ａ２類)に分けられる。Ｂ類はくびれ部・前方部先端を中心とした埋葬施設上以外の特定の場所に置かれ、底部が穿孔された壺形土器を中心としたもので、Ｃ類は墳頂部周縁あるいは墳丘周縁に配置、配列されたもので、焼成前に必ず底部が穿孔された同一規格の壺形土器のみで構成されている。このように分類した各出土類型を器種組成に表れた地域差の有無や祭祀的性格の相違から、Ａ１類→Ａ２類→Ｂ類→Ｃ類という変遷過程を想定している。つまり、出土状況と器種組成に周溝墓との共通性が認められるＡ類のなかで、器種組成が崩壊し始めるＡ１類から祭祀形態の儀礼化が進展するＡ２類へ、そして仮器化の進行という葬送儀礼の儀礼化、統一化に伴って、共同体的な葬送祭祀の場が埋葬施設上から他の特定の場所へ移行するＢ類への変遷を想定している。Ｂ類からＣ類への変遷には器種組成や古墳の内容に格差が存在することから、葬送祭祀上の飛躍を想定している。Ｃ類の古墳は畿内地方の前期古墳に類例が多いことから、畿内大和地方に初源を求めている。そして畿内勢力の葬送祭祀形態を受容することによって、畿内勢力の祭祀形態の枠にほぼ完全に組み込まれていった過程を想定している。またこの出土類型の変遷は、各出土類型の土器群を出土する古墳の相対的な先後関係とも合致している（塩



第１図　埼玉県域における出現期古墳分布図

谷1983)。

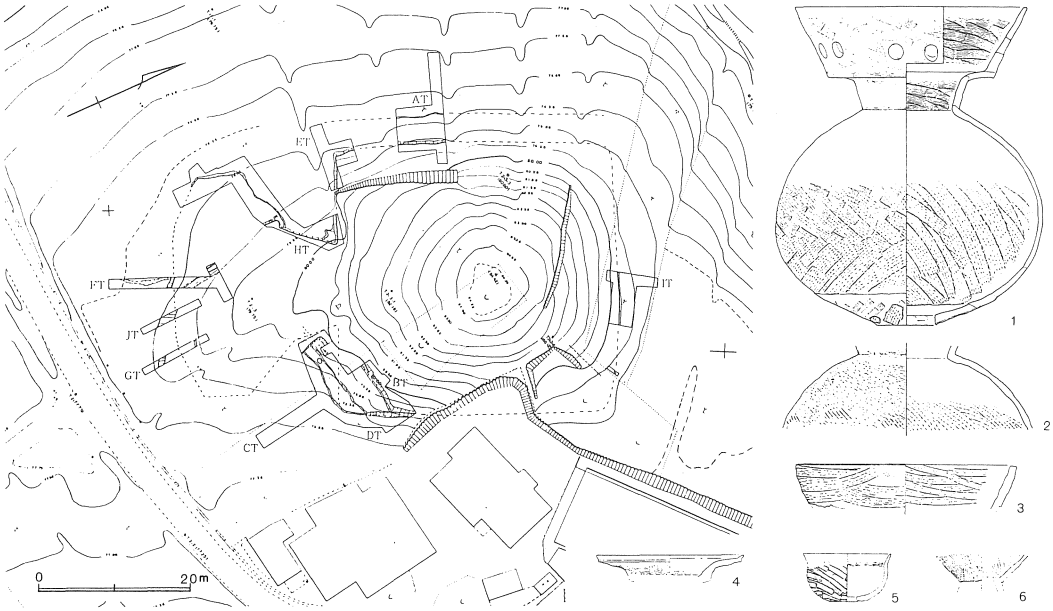
2　埼玉県域の出現期古墳

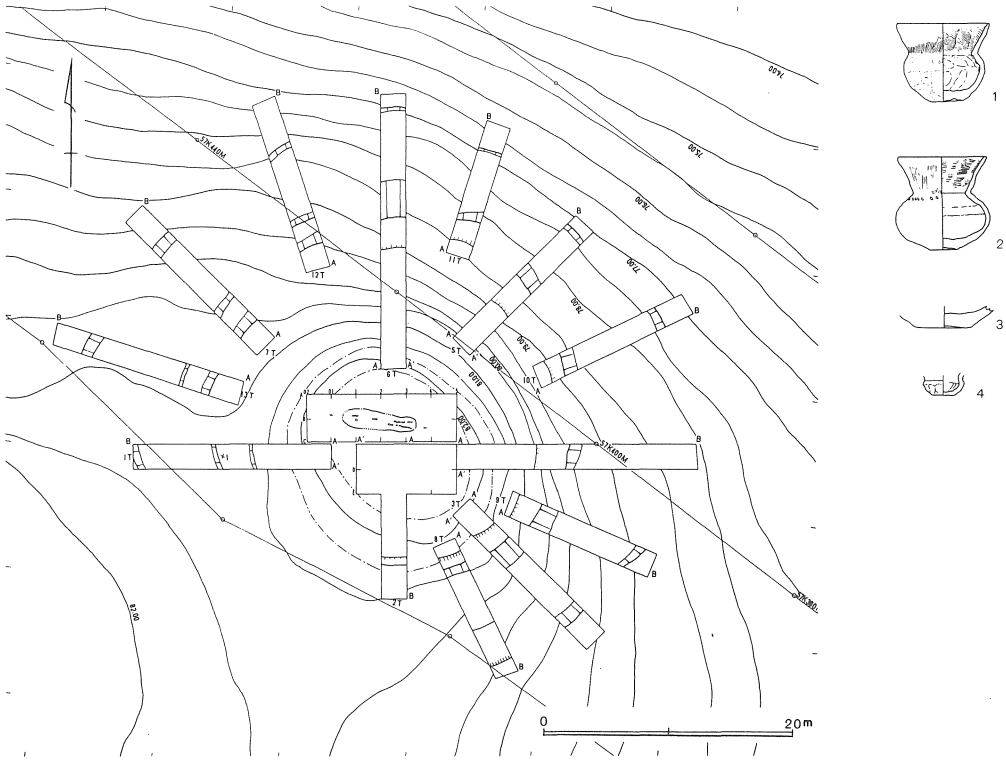
埼玉県域では出現期古墳の調査例が少なく、現状では資料不足の感は否めない。現在知られている出現期古墳が所在する地域は、児玉郡(児玉町・美里町)・東松山市・桶川市・川越市に限られている。これらの地域を水系別にみると、広義の利根川水系に位置する児玉郡周辺地域と、広義の荒川水系にあたる東松山市・桶川市・川越市の２地域に分けることができる（第１図)。

(1)　児玉郡周辺地域の出現期古墳

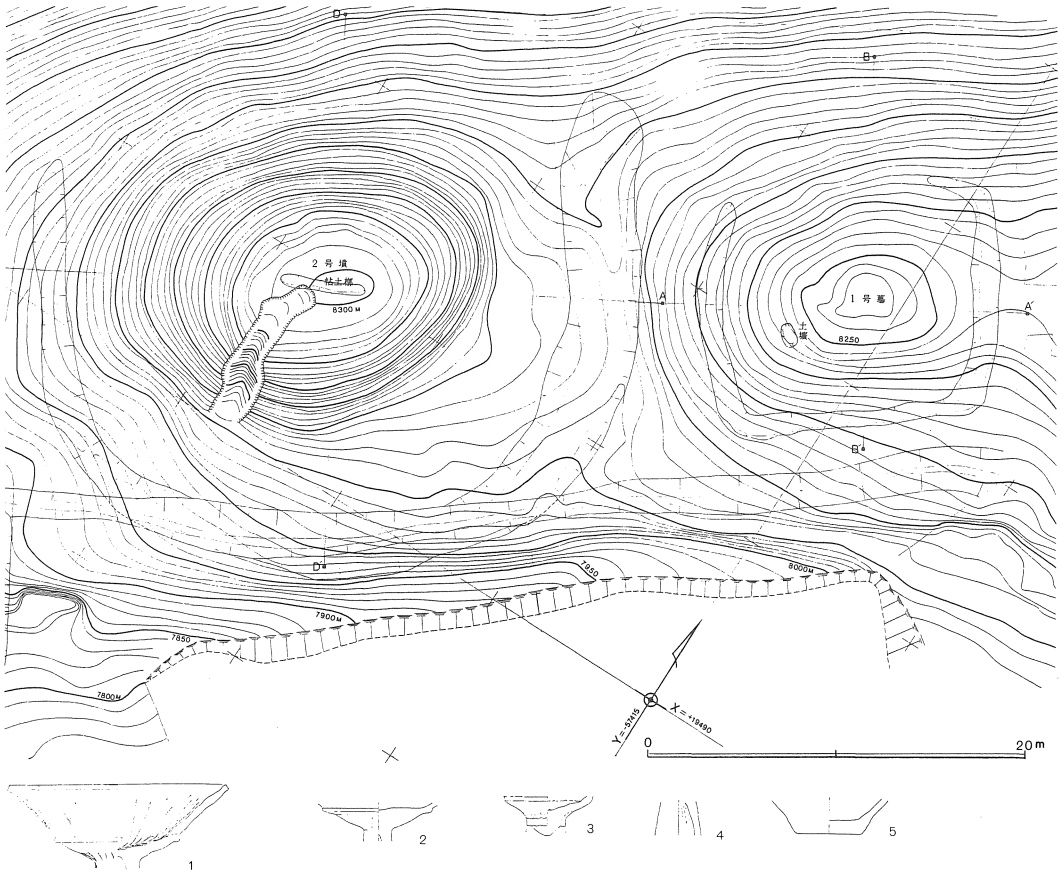
児玉郡周辺地域に所在する初期古墳は鷺山古墳(児玉郡児玉町下浅見)、前山２号墳(本庄市北堀)、安光寺１号墓・２号墳（大里郡岡部町本郷・児玉郡美里町石神）と長坂聖天塚古墳（児玉郡美里町関）である。

鷺山古墳（第２図、増田・坂本ほか1986）は墳丘長約60mの前方後方墳である。前方部が撥状に開き、奈良県天理市の纒向石塚古墳との類似が指摘されている。また西側くびれ部の周溝内には、壇状部分が存在している。遺物は壺形土器・台付甕形土器・椀形土器や手焙形土器片などが出土している。壺形土器には外傾する頸部に有段口縁をもつものと、外傾する二重口縁をもつものがある（註５)。





第2図　鷺山古墳(上)・前山2号墳(下)



第3図　安光寺1号墓・2号墳

鷺山古墳の前方部前面からは土器片が採集され、また現地形から、方墳の鷺山南古墳の存在が想定されている。

前山2号墳（第2図、小久保1978）は周溝内端径約28.5m、外端径約45mの円墳で、埋葬施設は推定全長6mの粘土槨である。墳頂部には平坦面が広がり、墳麓部には幅2～5mのテラス部が存在している。刀子・鎌・錐・やりがんな・剣が副葬され、壺形土器・小型坩形土器土器が出土している。

安光寺古墳群（第3図、増田ほか1981）は美里・岡部の町境に所在する諏訪山古墳群の一支群とみられている。安光寺1号墓・2号墳が並んで築造され、1号墓から2号墳への変遷が捉えられている。安光寺1号墓は東西15.8m、南北13.5mを測る方形の低墳丘墓（台状墓）である。墳麓部には土壙1基が確認され、周溝から高杯形土器が出土している。安光寺2号墳は内径27.0m、外径約32.0mを測る隅丸方形状の墳形で、埋葬施設は粘土槨である。直刀・剣・鉄斧・やりがんな・鉄鏃・臼玉・ガラス玉が副葬され、壺形土器・高杯形土器が出土している。

長坂聖天塚古墳（菅谷1974、菅谷・坂本1975）は径60mの円墳で、墳頂部から粘土槨3・木棺直葬3の計6基の埋葬施設が検出されている。2面の鏡や滑石製模造品をはじめとする副葬品が出土

している。土器は出土はしていないが、埴輪祭式が採用される以前の古墳であることから土器祭式が行なわれていた可能性が高い。

児玉郡周辺地域に所在する出現期古墳のなかでは、鷺山古墳が最も古く位置づけられている。前方部の形態や、布留式土器古相と対応すると想定されている出土土器から、４世紀中葉以前に築造されたものと考えられている。この時期の児玉郡周辺地域では、美里町南志戸川４号墓（美里町1986)、美里町村後遺跡（細田ほか1984)、美里町塚本山古墳群14号墓・34号墓（増田・小久保ほか1977)、岡部町石蒔Ｂ８号墓（佐藤・斉藤1978、佐藤1979）といったいわゆる前方後方形周溝墓が多く所在していることが注目される。いずれも鷺山古墳から3.5kmの範囲内に位置し、１遺跡に２基以上は存在していない。出土土器がこの地域の方形周溝墓の中では相対的に古いもので、比較的短期間に構築されたものと推定されている。また南志戸川４号墓と鷺山古墳の築造企画に基本的な共通性があり、両者が密接な関係にあったことが推定されている。これらの前方後方形周溝墓は詳細不明のため鷺山古墳との先後関係を明確にはしがたいが、村後遺跡の前方後方形周溝墓は出土遺物の検討から後出するものと考えられている。このように児玉郡周辺地域においては、まず前方後方形周溝墓と併行して前方後方墳が築造されている。その後、５世紀初頭前後（推定）には長坂聖天塚古墳が、続いて前山２号墳（５世紀前半)・安光寺１号墓（５世紀第２四半期以前)・２号墳（５世紀中頃以前）という円(方)墳が構築されている。

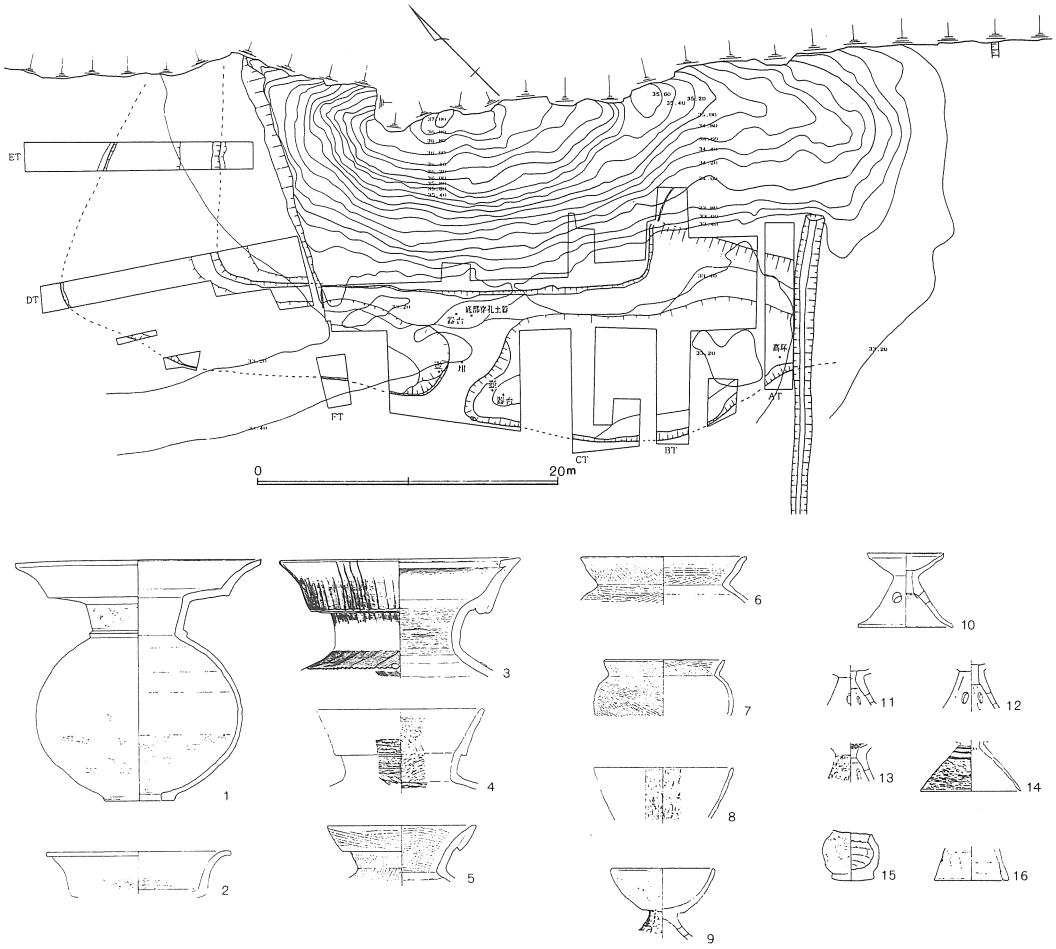
このような前方後方墳から円墳への変遷は、近接する群馬県南西部地域の状況と類似している。この地域の前方後方墳は富岡市北山茶臼山西古墳で、これに後続して築造された、三角縁神獣鏡を出土した富岡市北山茶臼山古墳や藤岡市三本木古墳、吉井町恩行寺古墳などはいずれも円墳である。北山茶臼山西古墳は墳丘長28mと規模は小さいが、鷺山古墳と同様に前方部が撥状に開き、前面が弧状を成している。前方後方墳の形態や墳形の動向は、近距離に位置する両地域の関連性の高さを物語っていると思われる。

(2)　荒川流域の出現期古墳

荒川流域に所在する出現期古墳として、諏訪山29号墳（東松山市西本宿)・天神山古墳（東松山市柏崎)・根岸稲荷神社古墳（東松山市古凍)・山の根古墳（比企郡吉見町久米田)・熊野神社古墳（桶川市川田谷)・三変稲荷神社古墳（川越市小仙波）がある。

諏訪山29号墳（第４図、増田・坂本ほか1986）は所属する諏訪山古墳群のなかで唯一の前方後方墳で、全長約53mと推定されている。周溝は不定形な形態で、墳丘側にはテラス状の平坦面が形成されている。後方部西側面の中央部にはブリッジが存在し、テラス状の平坦面に繋がっている。遺物は壺形土器・甕形土器・高杯形土器・小型器台形土器等が出土している。壺形土器には有段・折返・単口縁のものと駿東地方の大廓式の系譜をひくものがある。底部は焼成前に穿孔されている。甕形土器・器台形土器には布留式もしくはそれに類似するものが検出されている。

天神山古墳（第５図、若松1991）は従来全長60m前後の前方後円墳とされていた。しかし埼玉県内所在古墳詳細分布調査に関わる試掘・測量調査の結果、前方後方墳の可能性が高まっているが、トレンチ調査のため墳形や規模は確定されていない。五領式期の壺形土器口縁部片が出土し、広く



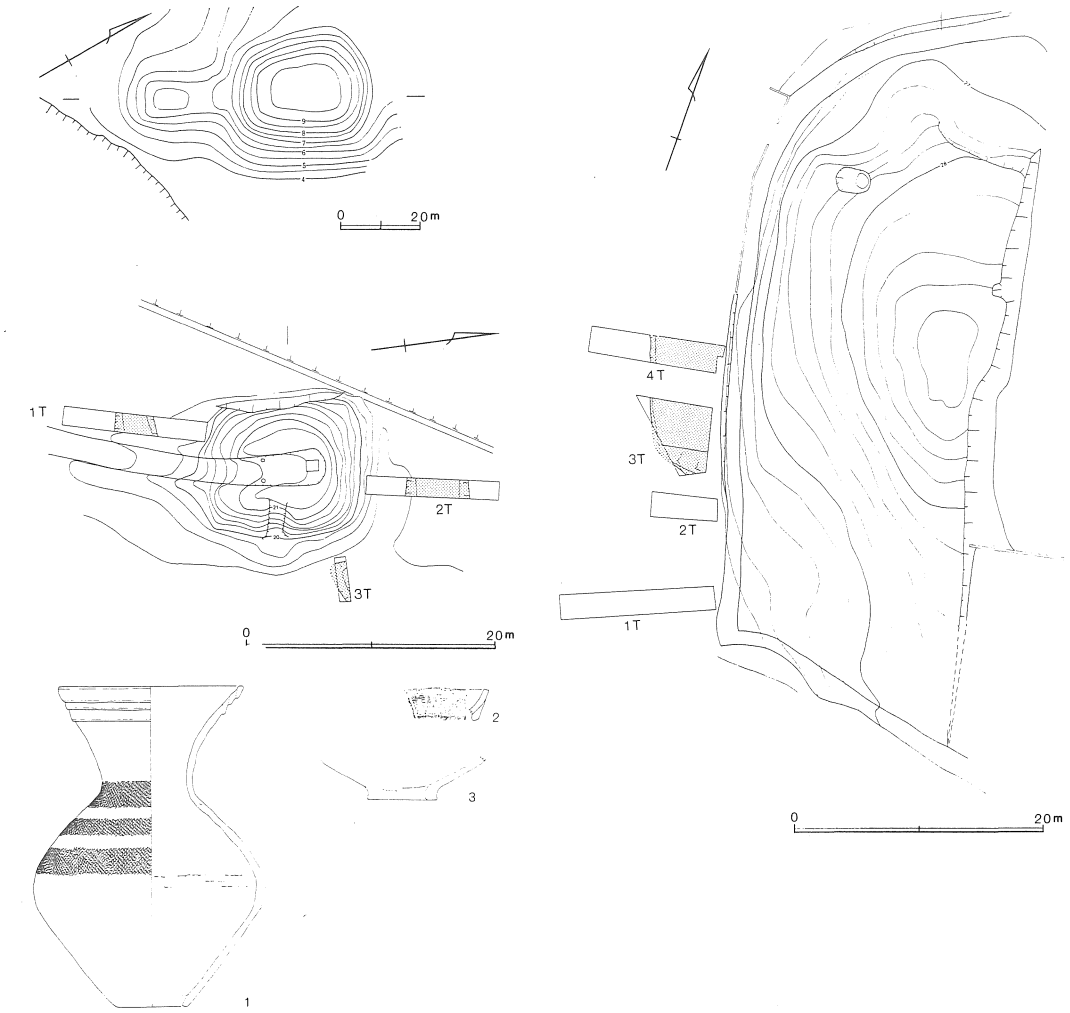
第４図　諏訪山29号墳

墳丘上からも採集されている。また埴輪は検出されておらず、４世紀代まで遡る可能性ある。

根岸稲荷神社古墳（第５図、若松1991）も埼玉県内所在古墳詳細分布調査に関わる試掘・測量調査の結果、小型の前方後方墳と推定されている。全長25m程度の規模で、前方部が短い。遺物は周溝から、焼成後に底部が穿孔された吉ヶ谷式系の壺形土器と五領式の壺形土器が出土している。

山の根古墳（第５図、若松1991）は主軸長54.8mの前方後方墳で、北西35mに一辺25mの方墳の山の根２号墳が位置している。西側くびれ部には後方部墳裾ラインに沿ってテラス状の平坦面が存在し、五領式の壺形土器・高杯形土器・台付甕形土器などが出土している。

熊野神社古墳（第６図、増田・坂本ほか1986）は墳丘裾部径約38mの円墳で、北西部に幅３ｍほどの張出部が存在する。葺石・段築・テラス等は確認されてない。1928年に墳頂部の社殿が改築され、この際に粘土や朱が確認されていることから埋葬施設は粘土槨と考えられる。鏡・玉杖・筒形銅器・硬玉勾玉や碧玉・瑪瑙・瑠璃製の玉類や石製品等の副葬品が検出されているが、土器の出土は記録されていない。1984年に実施された調査では、壺形土器を主体に小型器台形土器や小型丸底

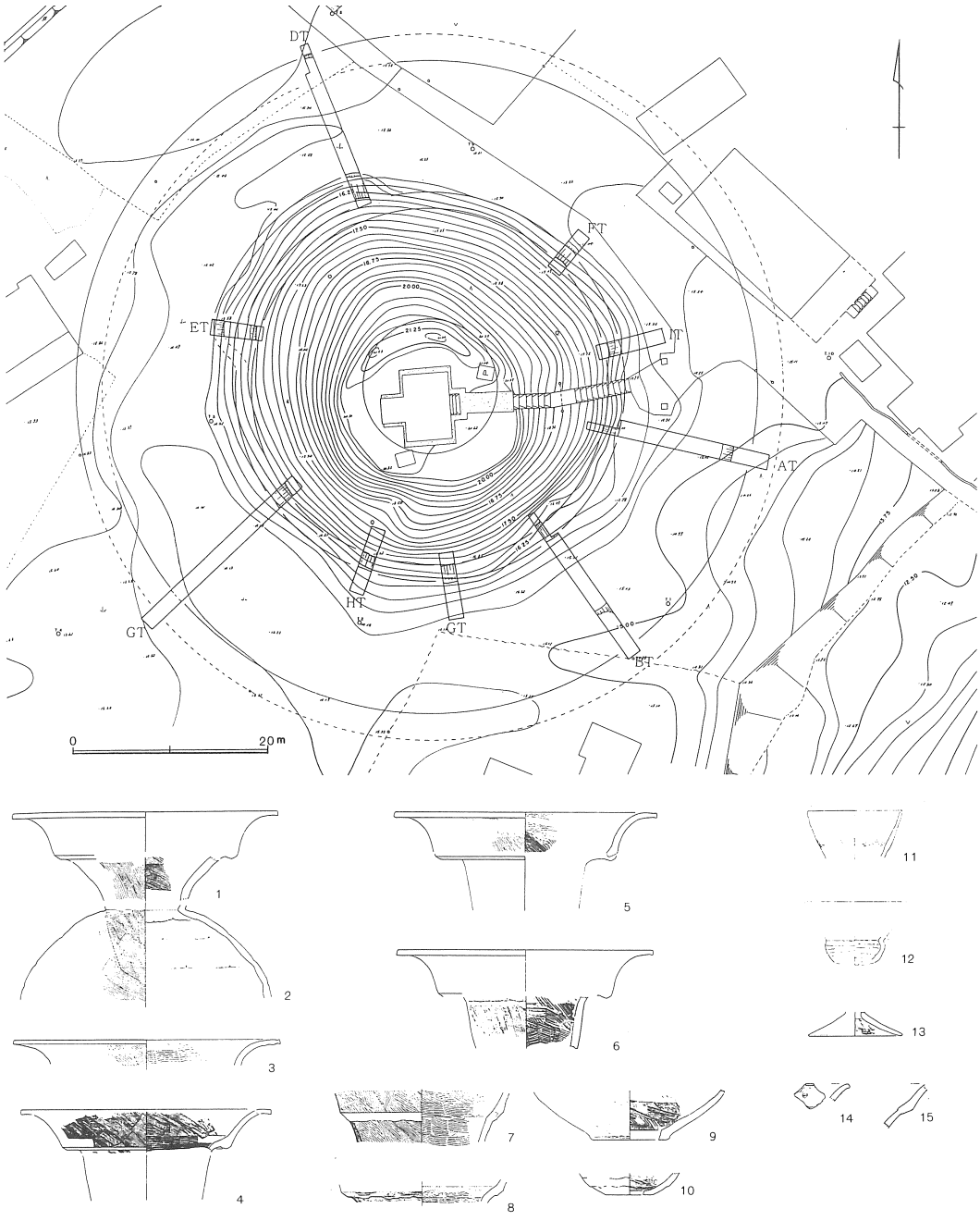


第５図　山の根古墳(左上)・根岸稲荷神社古墳(左下)・天神山古墳(右)

土器が出土している。壺形土器の破片は類似した特徴をもち、やや開き気味に立ち上がる頸部に二重口縁をもつものと、大きく開く頸部に二重口縁をもつものがあるが、大半は前者である。また一部に小型のものを含むものの、大型のものが主体となっている。底部は焼成前に穿孔されいる。小型器台形土器は脚部が大きく開くもので、畿内的な形態をもっている。

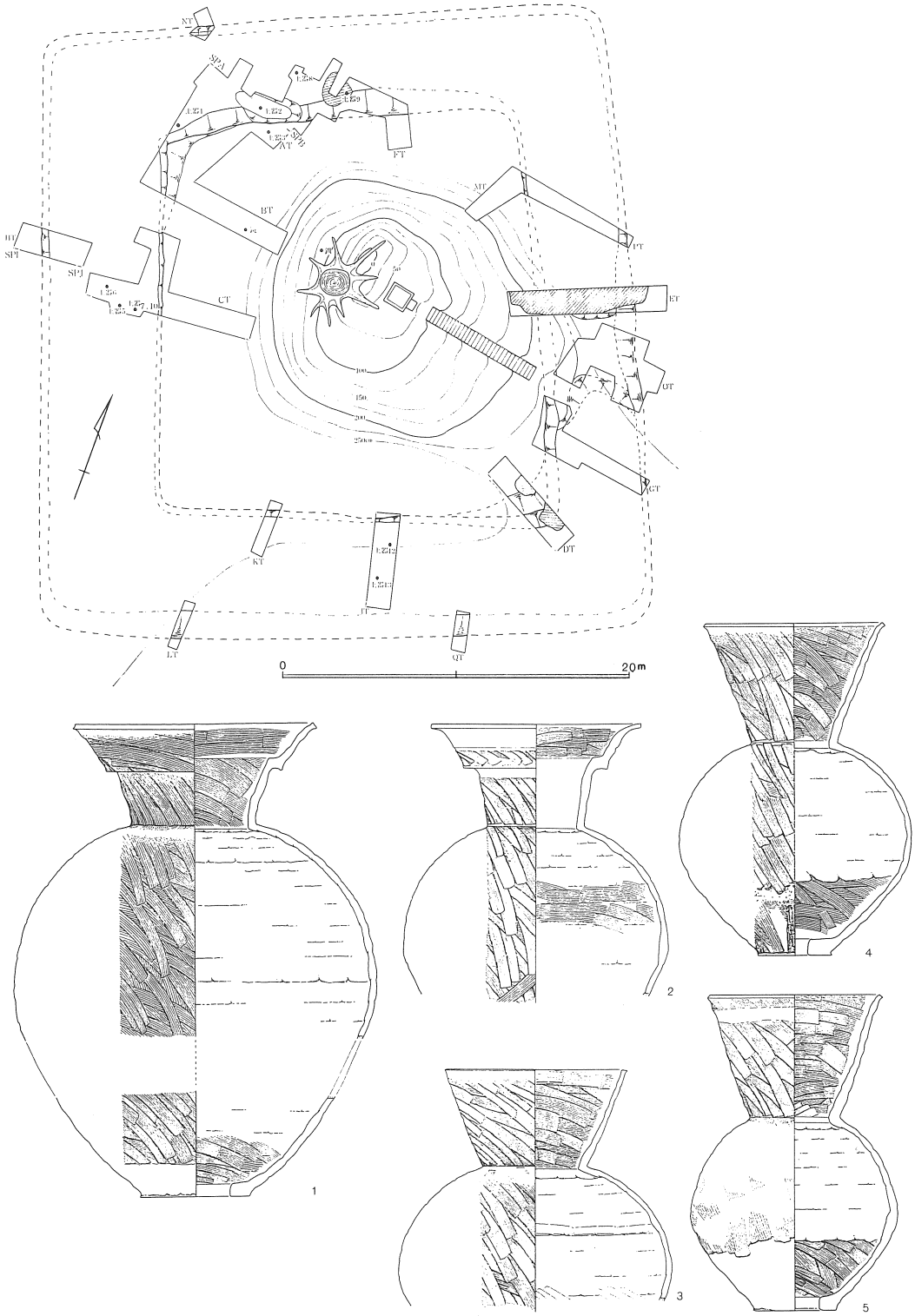
三変稲荷神社古墳（第７図、増田・坂本ほか1986）は碧玉製石釧と鼉龍鏡が採集された方墳で、北辺20.5m・南辺23.0m・西辺22.0m・東辺25.0mの規模と推定されている。一番長い東辺中央部にブリッジが形成され、墳丘の正面観が意識されているようである。出土した壺形土器は有段口縁・単口縁のものがあり、両者の割合はほぼ同じである。器形は全体的に規格化されている。底部は円環によって焼成前に穿孔され、木葉痕が残存している。また胴下半部の整形・調整には、それほど注意が払われていないようである。

荒川流域の出現期古墳のうち４基の前方後方墳すべてが、荒川中流域右岸の比企地方に集中して

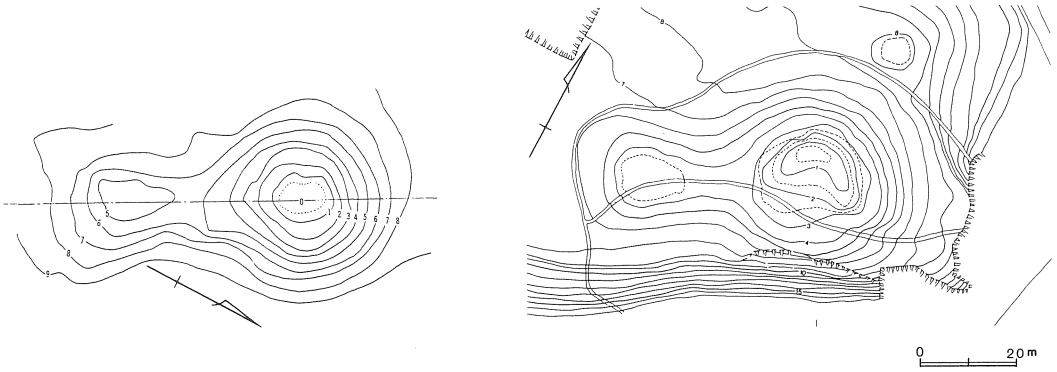


第6図　熊野神社古墳

いることは注目される。これらの出現期古墳は、出土遺物の検討から諏訪山29号墳→熊野神社古墳→三変稲荷神社古墳という先後関係は判明している。しかし天神山古墳、根岸稲荷神社古墳、山の根古墳の年代は明確にはなっていない。けれども山の根古墳は諏訪山29号墳と築造企画が類似していることから、諏訪山29号墳と前後する時期のものといえるのではないか。また天神山古墳と根岸



第７図　三変稲荷神社古墳



第８図　諏訪山古墳(左)・高稲荷古墳(右)

稲荷神社古墳もこれらと同様に前方後方という墳形をとり、また立地条件などから、ほぼ同時期の築造と仮定しておきたい。このように考えるならば、荒川水系では前方後方墳のあとに円墳・方墳が続いて築造されている。

ほかに同時期の墳墓として、江南町塩古墳群が注目されている。塩古墳群は２基の前方後方形の墳墓と16基以上の方形墳墓および数基の円形墳墓が、密集して構成されている(註６)。墳墓の密集する状況は、いわゆる前方後方形周溝墓を含む周溝墓群と同様であり、塩古墳群を周溝墓群と捉える説も出されている（菅谷1984)。埼玉県内の前方後方墳は密集して「群」を形成しているものはなく、山の根古墳のように方墳が近接しているものもあるが、これも含めて基本的には独立した立地を示している。また前方後方墳が存在する諏訪山古墳群も、塩古墳群のようには密集していない。さらに前方後方墳と前方後方形周溝墓は「前方後方形」という墳形は同じであっても、その規模に相違が認められる。県内の前方後方墳との比較から、塩古墳群を前方後方形周溝墓を含む周溝墓群とする説に賛同したい(註７)。塩古墳群は発掘調査が行なわれていないため、明確な年代は明らかではない。がしかし、塩古墳群と山の根古墳が荒川の支流である滑川流域に位置し、また塩１号墓の全長が山の根古墳の後方部長に一致するように築造された可能性が強いことから、これらの地域の前方後方墳との密接な関係をもっていたことが想定されている(坂本1990)。そこで荒川流域においても、児玉郡周辺地域と同様に前方後方墳と前方後方形周溝墓が併存していたことになる。

荒川流域で注目されるのは、初期の前方後円墳と考えられている東松山市諏訪山古墳（金井塚ほか1970)、川口市高稲荷古墳（斉藤ほか1985）の存在である（第９図)。両者の年代は明確ではないが、前方部が未発達な墳形や埴輪祭式が受容されていないことからも、初期段階の前方後円墳として捉えられよう。また諏訪山古墳は諏訪山29号墳の前方部前面に隣接しており、同一古墳群内での首長墓の変遷を認めることができる。このように荒川流域では児玉郡集辺地域と異なり、前方後方墳に続いて円墳・方墳・前方後円墳が築造されている。さらに群馬県域では前方後円墳の導入に伴って埴輪祭式を受容しているのに対して、東京都・神奈川県域（多摩川・鶴見川流域）では前方後円墳が築造されていても埴輪祭式が受容されていない。また相模川流域でも厚木市地頭山古墳や海老名市瓢箪山古墳の前方後円墳には埴輪祭式が受容されていないものの、円墳の伊勢原市小金塚古

墳に埴輪祭式が認められている（神奈川県教育委員会1982、久保・遠藤・後藤1983、遠藤1983、久保編1985、山本1991）。このように前方後円墳の築造に伴って埴輪祭式が受容されていないことから、荒川流域の出現期古墳の在り方は南関東的といえる。

3　出現期古墳の土器祭式の展開

鷺山古墳の有段口縁壺形土器は焼成前に底部が穿孔され、口辺部には2孔6単位の円形スカシ孔が一列に穿たれている仮器化が進んだものである。くびれ部付近や前方部西側から出土し、さらに後方部墳丘上にも破片が散在している。これらの分布状況から墳丘を囲繞していたものではなく、同じ形態の土器が墳丘の要所に配置されていた可能性がもたれている。二重口縁壺形土器と台付甕形土器は埋葬施設直上周辺に置かれていたものと推定されている。また手焙形土器も後方部墳頂から採集されていることから、後方部墳頂においてこれらの土器を使用した儀礼が考えられている。椀形土器は西側くびれ部の壇状部分付近から検出されている。小型器台形土器は伴出せず、有段口縁壺形土器が近くから出土していることから、墳丘くびれ部に置かれていたものが周溝内に転落した可能性がある。あるいは出土地点付近の壇状部分が造り出しのような機能をもち、ここで行なわれた儀礼行為に伴う土器として考えることもできる。埋葬施設上と墳丘の要所に壺形土器を中心に配置する土器祭式が執り行なわれている。その壺形土器は配置されている場所によって形態が異なり、墳丘の要所には仮器化が進んだ壺形土器が配置されている。さらにくびれ部周溝内の造りだし状の壇状部でも儀礼行為が行なわれていた可能性をもっている。鷺山古墳の土器は、埋葬施設上と墳丘の要所とに置かれていた可能性が高い。いずれの場合にも壺形土器が用いられているが、置かれている場所によってその形態は異なっているようである。また口辺部のスカシ孔の有無から機能までも異なっていたものと推測されている。このような鷺山古墳の土器祭式は、塩谷の出土類型ではA2類とB類に相当する。なかでもB類祭式は墳丘の要所と造り出し状壇状部で行なわれており、土器祭式の複雑さを物語っている。

続く長坂聖天塚古墳では、土器の出土が明確には確認されていない。埴輪祭式が受容される以前の古墳であるため、土器祭式が執り行なわれていた可能性はきわめて高い。もし仮に土器祭式が執り行なわれていたとしても、限定的な場所で少量の土器が使用された祭式が想像される。その後の5世紀前半代の前山2号墳では、壺形土器・小型坩形土器土器がテラス部などのごく限られた場所に置かれていた可能性が強い。これらの土器は故意に破砕されたようなものは認められず、完形の状態で置かれていたものと考えられている。安光寺1号墓では周溝から高杯形土器が、2号墳では、壺形土器・高杯形土器が墳丘および周溝から出土している。このように前山2号墳、安光寺1号墓・2号墳墳では墳裾部のごく限られた場所などで土器祭式が執り行なわれ、土器の使用量もきわめて少ない。長坂聖天塚古墳・前山2号墳・安光寺1号墓・2号墳の土器祭式は、塩谷の出土類型では鷺山古墳と同様にB類に属している。しかし鷺山古墳と比較すると、土器祭式が同じ類型に属していながらも質的には異なっているように感じられる。この違いを墳丘規模や墳形の違いに要因を求めるのか、また築造年代の差という時間の経過にともなって土器祭式が変化したものなのか、鷺山古墳以降の首長墓の変遷とそこで執り行なわれた土器祭式が確認されていないため明確にすることはで

きない。

諏訪山29号墳では壺形土器・甕形土器・高杯形土器・小型器台形土器の多くはブリッジ上および周辺の周溝内やテラス状部から出土し、ほかに前方部周溝や後方部周溝・くびれ部・後方部墳丘からも検出されている。ここで注目されるのは、形態の異なる壺形土器がいずれもブリッジ周辺に集中していることである。「壺」という同一器種として使用したのか、あるいは形態の相違が異なる意味をもっていたなどと想定できるが、配置などの復元が困難なため明確ではない。このように諏訪山29号墳ではブリッジおよび周辺の周溝内やテラス部と周溝内もしくは墳裾部に土器が置かれていたものと考えられ、塩谷の出土類型のB類に相当する（註８）。

同じ前方後方墳の山の根古墳ではテラス状の平坦面付近から五領式の壺形土器・高杯形土器・台付甕形土器などのかなりの遺物が出土していることから、ここで土器祭式が行なわれたことが想定される。根岸稲荷神社古墳では周溝から土器が出土しており、墳裾部での祭式が推測される。天神山古墳では墳丘上の広い範囲から土器が検出されていることから墳頂部での祭式が考えられるが、出土量が少ないことから要所に土器が配されていた可能性がある。山の根古墳が塩谷出土類型Ｂ類の土器祭式で、根岸稲荷神社古墳・天神山古墳はＣ類もしくはＢ類の土器祭式が執り行なわれていた。

熊野神社古墳では壺形土器の破片がいずれのトレンチからも出土し、また段築やテラス等が存在しないことから同じような器形のものが墳頂部に多量に配置されていたことが推定されている。これらの壺形土器は整形・胎土・焼成・色調など類似する点が多いことから、葬送儀礼にあたり特別に製作されたものと考えられている。塩谷の出土類型ではC類にあたる。ほかの小型器台形土器や小型丸底土器などの破片は張出部周辺部に限定されて出土していることから、ここでは墳丘上とは異なる儀礼が行なわれていたことが想定されている。塩谷の出土類型のB類に相当する。

三変稲荷神社古墳では壺形土器の大部分が転落したような状態で周溝内から発見されている。一部に墳丘立ち上がり肩部から検出されているものがあり、規格化された壺形土器が墳裾部に配置されていたものと推定されている。また有段口縁のものと単口縁のものとの出土量の割合がほぼ同じことから、規則的に交互に樹立された可能性が推測されている。塩谷の出土類型のＣ類に相当する。一方、ブリッジ付近では壺形土器の出土が少なく、配置されていなかったか、あるいは少なかったものと考えられ、さらに坩形土器の細片が検出されていることからブリッジ付近では他と異なる葬送儀礼が執り行なわれたものと想定されている。塩谷の出土類型のB類にあたる。

これらに続く前方後円墳の土器祭式は不明であるが、高稲荷古墳では、埋葬施設上において土器を用いた儀礼（塩谷出土類型A類）が行なわれていないことだけは確かである。

このように荒川流域の出現期古墳の土器祭式は、埋葬施設以外の場所で執行された祭式から規格化された壺形土器を配置する祭式へ移行し、塩谷の出土類型ではＢ類からＣ類への変遷として辿ることができる。しかし熊野神社古墳・三変稲荷神社古墳ではC類土器祭式に併行して、依然として周溝内施設（張出部・ブリッジ）でＢ類土器祭式が継承されている。しかし古墳の墳形に着目すると、前方後方墳がＢ類土器祭式（一部Ｃ類の可能性）、円墳・方墳ではＣ類土器祭式が執り行なわれている。そこで墳形に対応した異なった土器祭式が偶然に築造年代順に並んだものと考えることもでき、

現段階においてはこの可能性を完全に否定するに足る良好な資料はない。しかし熊野神社古墳が質・量ともに豊富な副葬品をもち、また三変稲荷神社古墳とともに古墳祭祀に際して規格化した壺形土器を製作させている。この規格化した壺形土器の生産には相応の勢力が背景にあるものと想像され、さらに立地・地理的条件も加味すれば、両古墳とも首長墓として認めることができよう。そこで前方後方墳と熊野神社古墳・三変稲荷神社古墳の土器祭式の変遷を、首長墓の土器祭式の変遷として考えていきたい。ただし、これらの首長は直接的に繋がる（直系）首長ではない。

児玉郡周辺地域と荒川流域の出現期古墳では、Ｂ類の土器祭式が展開されているものが多い。しかしその内容は各古墳ごとにまちまちであり、また１古墳では併行して数ヵ所で執り行なわれている。同じＢ類の範疇で捉えられる土器祭式も、執行される場所によって儀式の内容や性格が異なっていたものと考えられる。両地域で認められるＢ類土器祭式が行なわれた場所は、５ヵ所に分けられる。仮にそれぞれＢ１～Ｂ５類まで細分すると、Ｂ１類が墳丘の要所（墳丘上）・Ｂ２類がくびれ部・Ｂ３類が限定された墳裾部・Ｂ４類が周溝内ブリッジ・Ｂ５類が特別な施設で行なわれていたものである。そこでＢ類の細分から、再度、土器祭式の変遷をみてみたい。

児玉郡周辺地域では鷺山古墳：Ａ２類＋Ｂ１類＋Ｂ５類（Ｂ２類）→長坂聖天塚古墳：不明→前山２号墳：Ｂ３類、安光寺１号墓：Ｂ３類、安光寺２号墳：Ｂ３類（＋Ｂ１類）という変遷を示している。鷺山古墳と前山２号墳などでは築造年代に差があるが、Ｂ類土器祭式の執り行なわれた場所が墳丘上から墳裾部へ移行していったことが窺われる。

一方、荒川流域では諏訪山29号墳：Ｂ４類＋Ｂ２類＋Ｂ１類(＋Ｂ３類)、天神山古墳：Ｃ類かＢ１類、根岸稲荷神社古墳：Ｂ３類かＣ類、山の根古墳：Ｂ５類（Ｂ２類）→熊野神社古墳：Ｃ類＋Ｂ５類→三変稲荷神社古墳：Ｃ類＋Ｂ４類という変遷を一応辿ることができる。しかし４基の前方後方墳の先後関係が明確ではないためにＢ類からＣ類への移行が認められるのみで、細分したＢ類の変遷を辿ることはできない。ただしＣ類の可能性もある天神山古墳・根岸稲荷神社古墳は、諏訪山29号墳・山の根古墳よりも相対的に新しく捉えることができるかもしれない。出土遺物の綿密な比較ができない現状ではこのように考えるには早急すぎるが、もし仮にこの想像が成り立つとすれば、Ｂ類はくびれ部やブリッジなどの特別な施設といった限定的な場所から、墳丘上・墳裾などに移行していった過程を読みとることができる。そしてこれに続く、墳頂部周縁や墳裾部周縁で執り行なわれたＣ類へスムースに推移していくものと思われる。つまり土器祭式が執り行なわれた場所が、埋葬施設上の「中心点（Ａ類）」から「周辺の複数の点（Ｂ類）」へ、やがて「線（Ｃ類）」という、「点」から「線」へ変化していったことが窺われる。

このように児玉郡周辺地域ではＢ類土器祭式が継続されているのに対して、荒川流域ではＢ類土器祭式からＣ類土器祭式へ推移し、継続する前方後円墳の有無ばかりではなく、土器祭式の変遷にも違いが認められる。両地域ともまず前方後方墳が築造され、続いて円墳（熊野神社古墳・長坂聖天塚古墳）が築かれている。熊野神社古墳と長坂聖天塚古墳は副葬品が豊富であり、畿内政権との関連を想定させる。そこで前方後方墳から円墳への変化は、畿内政権との関係が大きな要因となっていたのではないだろうか。時期が若干異なっている熊野神社古墳と長坂聖天塚古墳を比較することに問題はあるが、この両者の土器祭式はたいへん異なっている。Ｃ類土器祭式の熊野神社古墳に

対して、長坂聖天塚古墳では土器の出土が認められていない。古墳の時期からは底部穿孔壺形土器の存在が想定されているが、もし仮に存在してもC類土器祭式の執行は考えられない。そのため熊野神社古墳と長坂聖天塚古墳では、一連の古墳祭祀に大きな相違がある。このような違いが、後続する前方後円墳の有無に影響しているものと思われる。荒川流域では前方後円墳の諏訪山古墳・高稲荷古墳が築造されているが、児玉郡周辺地域では長坂聖天塚古墳に隣接する美里町川輪聖天塚古墳（塩野1973)、格子目タタキのある埴輪を出土している本庄市公卿塚古墳（菅谷1970・増田・坂本ほか1986、太田・佐藤1991)・児玉町金鑽神社古墳（増田・坂本ほか1986)・児玉町生野山将軍塚古墳（菅谷1984）など首長墓として円墳が構築されている。以前、筆者は関東地方および周辺地域の出現期古墳の分布から、従来から想定されている東山道ルートと東海道ルート（甘粕・久保1966）に加えて、河川交通を利用した樹枝状に拡散しながら東進していった経路を想定した(山本1991)。この経路では児玉郡周辺地域が大局的な東山道ルートに、一方荒川流域は大局的な東海道ルートに相当する。またこれは古墳の墳形にみられる児玉郡周辺地域と群馬県南西部地域地域との関係と、荒川流域と南関東地方の関係からも容認される。古墳の伝播経路の違いによって、属した「圏」が異なり（註9)、墳形・土器祭式までも相違もさせることになったのであろう。

4　土器祭式の発展

埼玉県域の児玉郡周辺地域と荒川流域では、埴輪祭式受容以前の出現期古墳の墳形や土器祭式が異なっていることが明らかになった。

さて、児玉郡周辺地域の鷺山古墳では埋葬施設上と墳丘の要所やくびれ部に土器が配置される祭式が行なわれ、用いられた壺形土器は配置場所によって形態が区別されている。いずれも焼成前底部穿孔の儀器化されたものであるが、くびれ部から出土している有段口縁壺形土器は口辺部にスカシ孔が穿たれたより仮器化の進んだものである。このような口辺部にスカシ孔が穿たれた壺形土器として、群馬県藤岡市堀ノ内遺跡DK—4号方形周溝墓例が知られている。三日月状のスカシ孔が配されているもので、口辺部や肩部に楕円形や半円形のスカシ孔が穿孔されている甕形土器と伴出している(前原ほか1982)。さらに群馬県前橋市堤東遺跡2号前方後方形周溝墓では、受け部に三角形のスカシ孔が穿たれた器台形土器が出土している(松田ほか1985)。このようにスカシ孔が穿孔されている土器が近接する群馬県の周溝墓にも確認されており、この時期には古墳と同じように周溝墓でも儀器化の進行が行なわれている。つまり鷺山古墳のスカシ孔が穿孔されている壺形土器が、前方後方墳という集団から卓越した墳墓のための祭器として成立した訳ではないことは確かである。またこのように儀器化された壺形土器からは、壺形埴輪も想起される。なかでも群馬県太田市朝子塚古墳の胴部下半に円孔があるもの（松島・尾崎ほか1968、橋本1976）や、山梨県中道銚子塚古墳の口辺部と胴部にスカシ孔が穿孔されているもの（坂本ほか1986・1988、坂本1987）などの、スカシ孔が穿孔されている壺形埴輪との関連が予想される。しかしこれらの壺形埴輪は円筒埴輪や朝顔形埴輪と共に埴輪祭式を構成しており、単に壺形土器の儀器化が進行して壺形埴輪に到達したものとは考え難い。さらに注目されるのは、児玉郡周辺地域では川輪聖天塚古墳から壺形埴輪とされるものが出土していることである。詳細は不明であるが、この壺形埴輪は墳丘を囲繞していた可能性

がもたれている(塩野1973)。けれども児玉郡周辺地域では、鷺山古墳から川輪聖天塚古墳へと繋がる古墳の変遷が解明されておらず、また壺形土器から壺形埴輪への形態的な推移もつかむことはできない。加えて、児玉郡周辺地域では格子目タタキによって整形された特異な円筒埴輪が金鑽神社古墳や公卿塚古墳に含まれており、川輪聖天塚古墳の壺形埴輪を考える場合にはこのような特異な埴輪が用いられた祭式が執行されている地域的特色をも考慮する必要がある。これらのことから、現段階においてはスカシ孔が穿孔されるなどの特に儀器化の進行した壺形土器と壺形埴輪との関連を予想するのみで、その解明への道のりは程遠い。このためには、鷺山古墳から川輪聖天塚古墳・金鑽神社古墳・公卿塚古墳への児玉郡周辺地域の古墳の変遷や、土器祭式から埴輪祭式への推移が明らかになるのを待つよりほかに手段は無い。今後の資料の増加に期待せざるおえない。

荒川流域の出現期古墳において土器祭式が行なわれた場所は、墳丘上の特定の場所から墳丘全体へ点的に広がり、さらに墳頂部や墳裾部の周縁に並ぶ、「点」から「線」へと推移していったものと想定することができた。なかでも前方後方墳の土器祭式は、塩谷の出土類型のB類という大きな枠で括ることはできるものの、土器祭式は各古墳ごとに様相を異にしている。土器祭式は土器の配置位置や器種の組み合わせの相違によって、執行された儀礼の内容や意味合が違っていたものと想定される。発掘調査の結果から古墳の儀礼を復元することは困難であるが、土器の配置位置や器種の組み合わせの相違などが複雑に関連しあいながら古墳祭祀の一要素としての土器祭式を構成していたものといえる。つまり荒川流域では前方後方墳という定形化した古墳が波及・築造されていながらも、土器祭式の多様化に認められるように、そこで執り行なわれた古墳祭祀までは定形化されていなかったこととなる。

荒川流域のように、定形化された前方後方墳が築造されていながらもそこで執り行なわれる土器祭式が各地域で統一されていないという状況は、関東地方やその他の地域でも広く認められている。前方後方墳は古墳発生期に畿内を中心とする地域で完成された前方後円墳に代表される「画一的な古墳」のひとつで、 瞬く間に他の地域へと波及している。このような古墳出現期の現象の理解は、「畿内勢力による全国支配体制の成立」と、「畿内勢力と各地方勢力との連合・同盟関係の成立」とに別れている。いずれにしても、画一的な前方後円形・前方後方形の古墳が全国的に築造されていることから、畿内勢力の優位性は認められる。その一方では各地方勢力に自主性・独自性が容認され、そのひとつとして古墳祭祀の不統一として表れている。定形化された古墳における不統一な古墳祭祀は地方のみでなく、畿内においても決して統一されたものではない。荒川流域の場合にも比企地方に4基の前方後方墳が集中していながら、それぞれ異なった土器祭式が行なわれている。つまり、古墳祭祀はそれぞれの古墳に葬られた被葬者の地位・性格や存立基盤などが表現され、土器祭式の相違も被葬者に帰結するものといえる。さらに定形化された古墳と古墳祭祀・土器祭式の関係は、畿内勢力とそれぞれの地域の首長との関係を示唆する可能性もある。例えば、諏訪山29号墳では有段・折返・単口縁の壺形土器のほかに、駿東地方の大廓式の系譜をひく壺形土器や布留式もしくはそれに類似する甕形土器・器台形土器が土器祭式に用いられている。このような外来系土器の存在から、他地域との交流をもちながら卓越した首長へ成長していった姿を窺うことができる。これに対して、小型の前方後方墳の根岸稲荷神社古墳では在地の土器である吉ヶ谷式の壺形土器が用いられてい

る。諏訪山29号墳と比較すると、墳丘規模や土器に象徴されているように、いまだ地域から卓越するほどの勢力を保持するに至っていない首長墓といえるのではないだろうか。さらに前方後方墳の土器祭式を考える場合、同時期に存在した前方後方形周溝墓の土器祭式も併せて考える必要がある。関東地方へ弥生時代中期後半に出現した方形周溝墓の祭祀は、壺形土器を中心とする土器祭式であった。そして弥生時代後期後半から古墳時代前期前半にかけて壺形土器・器台形土器・高杯形土器のセット関係が成立したものと考えられている。また岩崎卓也は近畿地方の弥生時代中期の方形周溝墓の実例から、用いられた土器が方形周溝墓の溝底ないし方台部の四隅におかれていたものと想定している(岩崎1975)。現在のところ前方後方周溝墓の祭祀は明確にはなっていないが、方形周溝墓の祭祀とはさほど差のないものと考えてよかろう。このような方形周溝墓の土器祭式は出現期古墳の前方後方墳の土器祭式と相通ずるものがあり、塩谷の出土類型にあてはめるならば、B類に相当する。言い換えれば、前方後方墳で執行された祭祀は弥生時代の墳墓祭祀が発展的に継承されたものといえよう。

これらの前方後方墳に続いて、4基の前方後方墳が築造された比企地域と対峙する荒川左岸に熊野神社古墳が築造されている。荒川流域ではこの円形首長墓の出現を契機にして、土器祭式が規格化・大型化された多量の土器が墳頂部周縁を巡るC類土器祭式へと変容している。一方、4基の前方後方墳が造営された荒川右岸でも、三変稲荷神社古墳で規格化された2つの形態の壺形土器が墳裾部へ意図的に交互に並べられるC類土器祭式が執り行なわれている。しかし三変稲荷神社古墳は方形墳で、前方後円墳の諏訪山古墳との先後関係が不明のため言及しがたいが、少なくとも荒川右岸では小型墳墓に方形墳が継続されていたことは確かであろう。さらに壺形土器は規格化・大型化・多量化に加えて、胴部下半の整形が簡素化されている。熊野神社古墳よりも祭器として仮器化が進行し、配置方法とともに、より発展した土器祭式が展開されている。そしてこのような壺形土器を墳丘上に並べるC類土器祭式は、関東地方の各地域でも認められている。そこでC類土器祭式は前代の前方後方墳で行なわれていた土器祭式がそれぞれの地域で発達したものと考えるよりも、外方から一元的に伝播された土器祭式と捉えることができよう。つまり熊野神社古墳・三変稲荷神社古墳の土器祭式は、方形周溝墓の祭祀から飛躍した祭祀といえよう。けれども、その一方では、熊野神社古墳では造り出し状の張り出し部において、三変稲荷神社古墳ではブリッジにおいて、依然としてB類土器祭式が行なわれている。そこで、C類土器祭式は一元的に伝播された形骸化された土器祭式として理解されるのではないだろうか。

C類土器祭式における土器（祭器）の規格化は、一元的に伝播された祭式の共通の祭器のためであるとも言える。しかし祭器を多量に使用するC類土器祭式には、祭器の大量生産を支える合理的な方法が必要となる。祭器の規格化はその手段として適しており、敢行されたのであろう。また祭器を大型化した場合にも、従来の大きさのものを配置するよりも個体数そのものが少なくすみ、全体における祭器製作時間の短縮に繋がる合理的な方法といえる。ただし、祭器の大型化は製作の合理化よりも、むしろ墳丘に配置した際の視覚的な要素を意識して行なわれたものと思われる。とするならば、C類土器祭式は墳丘外へも「掲示作用」をおよぼす大きく発展した祭式と評価できる。また祭器の規格化・大型化は大量生産という製作の合理化を推進させたばかりではない。規格化さ

れた祭器を製作するためには技術・技法の画一化を図り、大型化に対応した製作方法の指導が必要となってくる。ここでは集約的な土器生産体制が想起させられ、このような合理的・集約的な生産体制を組織するためには相当の勢力を想像せざるをえない。そこで前代の前方後方墳の首長と比較するならば、熊野神社古墳・三変稲荷神社古墳の被葬者がより強固な首長へと成長していったものと理解できる。熊野神社古墳では質・量とも豊富な副葬品が埋納されており、畿内勢力の影響を窺うことができる。両者がどのような関係にあったのかは明らかにできないが、畿内勢力との関係を背景にして、合理的集約的な祭器生産体制を組織することができたのであろう。さらに前代の前方後方墳が造営されている比企地方に荒川を挟んで対峙する位置に熊野神社古墳が築造されたのも、そして前方後方墳から円墳という墳形の変化も畿内勢力との関係が影響していた可能性がある。

土器が墳丘を巡って配置されるC類土器祭式から、円筒埴輪を配列する埴輪祭式との関係に注目せずにいられない。埴輪は、形態的には吉備地方の弥生時代後期後半に出現した特殊器台形土器、特殊壺形土器に起源が求められている（近藤・春成1967）。特殊器台形土器・特殊壺形土器を出土する吉備地方の岡山県倉敷市楯築遺跡や岡山県真備町黒宮大塚遺跡では埋葬施設上を中心に無規律な状態で検出されている（近藤編1992、間壁・間壁・藤田1977）。また山陰系（在地系）・北陸系・吉備系（特殊器台形土器・特殊壺形土器）の土器が出土している島根県出雲市の西谷3号墓・4号墓（四隅突出型墳墓）でも、土器の系譜に関係なく無秩序な状態で埋葬施設上から検出されている（註10・11）。ここでは特殊器台形土器・特殊壺形土器も他の土器と同様なあり方をし、特別扱いはされていない。このような特殊器台形土器・特殊壺形土器を含めた土器の出土状態から、吉備・山陰地方の弥生時代墳丘墓では土器が埋葬施設上や墳頂部に配列されていた可能性はほとんどないものといえる。むしろ葬送儀礼の終了後、埋葬施設上に一括投棄されたものと考えた方が妥当である。つまり埴輪の祖形とされる特殊器台形土器・特殊壺形土器を用いた土器祭式は、「配列」という点で埴輪祭式と大きな差異が存在している。また近年、最古段階の器台形埴輪を用いた埴輪祭式の資料が畿内地方において相次いで発見され、埴輪祭式は畿内地方において成立したする見解が有力となっている（註12）。さらに焼成前に底部が穿孔された有段口縁・二重口縁の壺形土器の系譜が、畿内地方に求められている（小嶋1983、蒲原1989）。これらのことから、C類土器祭式は畿内地方から伝播された土器祭式と考えられよう。このことは、熊野神社古墳の畿内的な質・量とも豊富な副葬品からも裏づけられよう。

おわりに、熊野神社古墳・三変稲荷神社古墳の時期には既に埴輪祭式は確立しており、関東地方でも群馬県の朝子塚古墳や神奈川県の小金塚古墳で埴輪祭式が受容されている。にもかかわらず、C類土器祭式が執行されている。このことから、C類土器祭式は埴輪祭式が受容できなかった古墳の代替祭式の可能性もある。その一方では、「配列」という埴輪祭式を受容する素地が確立したものと評価できよう。事実、熊野神社古墳・三変稲荷神社古墳に続く東松山市雷電山古墳では、埴輪の形態こそ異様ではあるが、一応埴輪祭式が受容されている。しかし雷電山古墳から継続する埴輪祭式は認められておらず、本格的な埴輪祭式の受容はさきたま古墳群の成立を待たなければならない（註13）。

本稿を草するにあたり、多くの方々にお世話になった。記して感謝の意を表わしたい。

岡山県立吉備路郷土館、岡山大学文学部　稲田孝司、岡山大学文学部考古学研究室助手　絹川一徳、岡山県立博物館副館長　高橋　護、倉敷考古館館長　間壁忠彦、島根大学文学部教授　渡辺貞幸（敬称略）

なお、本稿は平成３年度　財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団研究助成の成果である。

（1993年８月31日稿了）

本稿の挿図は以下の文献から転載した。また遺物実測図は１／８に統一した。

第２図　鷺山古墳：増田・坂本ほか1986　P13・14、P19
　　前山２号墳：小久保1978
第３図　安光寺１号墓・２号墳：増田ほか1981　P81・P83
第４図　諏訪山29号墳：増田・坂本ほか1986　P29・30、P35
第５図　山の根古墳：埼玉県1982　P633
　　根岸稲荷神社古墳：若松1991　P12
　　天神山古墳：若松1991　P11
第６図　熊野神社古墳：増田・坂本ほか1986　P57・58、P62
第７図　三変稲荷神社古墳：増田・坂本ほか1986　P71・72、P75～77
第８図　諏訪山古墳：金井塚ほか1970　P８
　　高稲荷古墳：斉藤ほか1985　P27

註

註１　本稿では、埴輪祭式の受容以前の古墳を「出現期古墳」として捉えていく。これは埴輪祭式が古墳祭祀にふさわしい完成された祭式であると評価すると同時に、埴輪祭式の受容以前の古墳祭祀を古墳祭祀の変遷の上での１段階として考えているためである。また本稿で対象とする埼玉県域は、関東地方および周辺地域のなかでは埴輪祭式の受容が遅れている。このような地域的状況をも鑑みて、厳密に言えば「出現期古墳」の範疇のなかで捉えるには疑問が残る古墳も含めて考えていく。

註２　「土器を用いた祭式」を古墳祭祀の一要素として捉え、「土器祭式」という用語を用いた。

註３　岩崎は註において、「森浩一らは、墳頂部の土器のあり方を、棺直上のものと、墳頂表土層にあるものとに区別して考えている（森浩一他　1972『井部八幡山古墳』同志社大学報告５）。だが、従来の報告による場合、このように細分することが困難である。したがって、やむおえず、この両者を一括して取り扱っておきたい」と述べている。

註４　これらの古墳が畿内地方に確実な例がなく、山陰や関東地方に多いことや、大型の三角縁神獣鏡をもつ巨大古墳以外の中・小規模古墳であることから、墳頂にみる土器群を「黄泉戸喫」と同じ観念に由来するという理解を否定している。

註５　口縁部の形状は塩谷の分類に従う（塩谷1992）。有段口縁は、口縁部が頸部から水平にのび、明瞭な段をなして外反して広がるものであり、二重口縁は外傾する頸部から屈曲して外反する口縁部にいたるものである。また、複合口縁は、口縁部中段、あるいは上端に突帯状の貼りつけを施したもので、立面的には有段・二重口縁状を呈するものである。

註６　従来、塩古墳群は前方後円墳２基と方墳１基および円墳の計31基からなる古墳群として捉えられていた。しかし江南村教育委員会（当時）の現地踏査等の結果、５支群・59基からなる広範囲にわたる古墳群であったことが判明している（新井1982）。しかし1982年に菅谷・坂本によって従来の範囲の測量調査が行なわれ、前方後方形２基、方形・円形の墳墓で構成されていることが確認された。本稿の塩古墳群は、従来の範囲に限っている。

註７　簡単に言うならば、独立した立地を示すものが前方後方墳で、集団墓の中に存在するものが前方後方形周溝墓であると予測している。規模や立地状況には、被葬者の勢力や所属する地域社会の状況が反映されているもので、独立墳の被葬者は集団墓の被葬者よりも、より卓越した存在であることは間違いない。一方、前方後方形周溝墓の被葬者は「前方後方形」の墳墓を構築していながらも、弥生時代から継続されている周溝墓群＝集団墓の延長上にある。彼らは所属する周溝墓群の被葬者

のなかでは最有力の者であっても、いまだ弥生時代以来の伝統的社会から脱脚していない。前方後方墳と前方後方形周溝墓の併存は、卓越した首長を輩出した集団と、最有力者までの成長に留めた集団が存在していたこととなる。「前方後方形」の墳墓の前方後方墳は、東日本のほとんどの地域で出現期の古墳として築造されており、決して関東地方の方形周溝墓から段階的に成立したものではない。つまり、「前方後方形」の墳墓は外来的に波及してきたものである。にもかかわらず、被葬者の勢力や性格などの相違によって「前方後方墳」と「前方後方形周溝墓」が構築されているとすれば、この両者の存在は古墳出現期の複雑な社会状況を物語るものである。

註8　報告では、出土状況からブリッジ上を含めた周溝内に最初から置かれていたものと考えられている。さらに遺物の出土地点やその組み合わせから、周溝内において葬送儀礼がいろいろな形で行なわれていると推定されている。

註9　古墳の分布にみられる限られた区域・範囲の意味で「圏」という語を用いている。ここでは畿内政権との関係や経済・文化・生活、さらに勢力までも含めた社会を想定している。

註10　調査を行なわれた渡辺貞幸氏のご教示による。

註11　吉備・山陰地方の状況については塩谷修も指摘している（塩谷1990）。

註12　「埴輪の起源」を執筆した近藤義郎は、1967年の「埴輪の成立地を吉備に限る」という見解を「吉備において成立展開した特殊器台形土器・特殊壺形土器が、畿内中枢における前方後円墳の創出にあたり象徴化・形象化されて成立した可能性が高い」と改めている（近藤1985）。

註13　小嶋芳孝によって「土器供献による古墳祭祀は、少量の土器生産で執行できるが、埴輪祭祀を行なうためには極めて多量の埴輪生産を必要とする。埴輪祭祀が地方の古墳に広く普及するのは、一時に多量の生産が可能になる須恵器窯の普及に対応した時期である」とする興味深い見解が示されている（小嶋1983）。

引用・参考文献

甘粕健・久保哲三　1966「関東」『日本の考古学』Ⅳ　古墳時代（上）　P428～498　河出書房新社

新井　端　1982『塩前遺跡発掘調査報告書（塩古墳群と集落の調査）』江南村文化財調査報告第3集　埼玉県大里郡江南村教育委員会

岩崎卓也　1973「古式土師器再考」『史学研究』第91号　P1～26　東京教育大学文学部紀要

岩崎卓也　1975「埴輪起源論ノート」『日本文化史学への提言』　P107～123　弘文堂

遠藤秀樹　1983「相模川流域における古墳の展開」『専修史学』第15号　P44～58　専修大学歴史学会

太田博之・佐藤好司　1991『本庄遺跡群発掘調査報告書Ⅴ―公卿塚古墳―』本庄市埋蔵文化財調査報告第19集　埼玉県本庄市教育委員会

金井塚良一ほか　1970『諏訪山古墳群（第1次発掘調査報告）』東洋大学考古学研究会発掘調査報告第1集　考古学資料刊行会

神奈川県教育委員会　1982『埋蔵文化財緊急調査概要』神奈川県埋蔵文化財調査報告24　P25～49　神奈川県教育委員会

蒲原宏行　1989「北部九州出土の畿内系二重口縁壺」『古文化談叢』第21集（中）　P43～75

久保哲三・遠藤秀樹・後藤喜八郎　1983「古墳測量調査報告」『専修史学』第15号　P1～8　専修大学歴史学会

久保哲三編　1985「伊勢原市小金塚古墳調査報告」『専修考古学』第2号　専修大学考古学会

小久保徹　1978「前山2号墳の発掘調査」『東谷・前山2号墳・古川端』埼玉県遺跡発掘調査報告書第16集　P76～92　埼玉県教育委員会

小嶋芳孝　1982「装飾壺と初期古墳」『考古学と古代史』同志社大学考古学シリーズⅠ　P247～254

小嶋芳孝　1983「埴輪以前の古墳祭祀」『北陸の考古学』　P381～422　石川考古学研究会（引用はP418.L55～57）

小林三郎　1972「古墳出土の土師式土器Ⅰ」『土師式土器集成本編2（中期）』　P13～18　東京堂出版

近藤義郎・春成秀爾　1967「埴輪の起源」『考古学研究』第13巻第3号　考古学研究会
（近藤義郎　1985『日本考古学研究序説』　P337～359　岩波書店に再録）

近藤義郎編　1992　『楯築弥生墳丘墓の研究』　楯築刊行会
埼玉県　1982　『新編埼玉県史』資料編２　原始・古代　弥生・古墳
埼玉県　1987　『新編　埼玉県史』通史編１　原始・古代
埼玉県　1987　『荒川』人文Ⅰ　荒川総合調査報告書２
斉藤悟朗ほか　1985　『天神山・宮脇遺跡』川口市遺跡調査会報告書第６集　埼玉県川口市遺跡調査会
坂本和俊　1984　「埼玉県の前期古墳概観」『第５回　三県シンポジウム　古墳出現期の地域性』　P25～27・91～116　北武蔵古代文化研究会・群馬県考古学談話会・千曲川水系古代文化研究所
坂本和俊　1990　「東京・埼玉・神奈川」『古墳時代の研究』第11巻　地域の古墳Ⅱ東日本　P79～98　雄山閣出版
坂本美夫　1987　「甲斐銚子塚古墳出土の壺形埴輪」『考古学雑誌』第72巻第４号　P134～141　日本考古学会
坂本美夫ほか　1986　『国指定史跡　銚子塚古墳附丸山塚古墳―保存修理事業第１・２次概報―』山梨県埋蔵文化財センター調査報告第10集　山梨県教育委員会
坂本美夫ほか　1988　『国指定史跡　銚子塚古墳附丸山塚古墳―保存整備事業報告書―』山梨県埋蔵文化財センター調査報告第35集　山梨県教育委員会
佐藤忠雄　1979　「後榛沢遺跡群（石蒔Ａ・Ｂ遺跡）の調査」『第12回　遺跡発掘調査報告会発表要旨』　P18～19　埼玉県考古学会
佐藤忠雄・斉藤国夫　1978　『後榛沢遺跡群の調査』　埼玉県大里郡岡部町教育委員会
塩野　博　1973　「聖天塚古墳」『日本考古学年報』24（1971年版）　P38　日本考古学協会
塩野　博　1980　「埼玉の古墳」『埼玉の文化財』第20号　P４～50　埼玉県文化財保護協会
塩野　博　1984　「埼玉県の古式古墳―稲荷山古墳以前の北武蔵―」『埼玉県史研究』第13号　P１～26　埼玉県
塩野　博　1988　「埼玉県」『シンポジウム　関東地方における古墳出現期の諸問題』日本考古学協会編　P44～55・118～159　学生社
塩谷　修　1983　「古墳出土の土師器に関する一試論―関東地方の古式古墳を中心として―」『古墳文化の新視角』　P177～208　古墳文化研究会編　雄山閣出版
塩谷　修　1990　「関東地方における古墳出現の背景」『土浦市立博物館紀要』第２号　P１～15　茨城県土浦市立博物館
塩谷　修　1992　「壺形埴輪の性格」『博古研究』第３号　P１～18　博古研究会
菅谷浩之　1970　「壺形土器を出土した公卿塚について」『埼玉研究』第19号　P48～53　埼玉県地域研究会
菅谷浩之　1974　「古墳消滅の過程―付長坂聖天塚出土の石製刀子―」『埼玉考古』第12号　P39～45　埼玉考古学会
菅谷浩之　1984　『北武蔵における古式古墳の成立―児玉地方からみた北武蔵の古式古墳―』児玉町史資料調査報告　古代第１集　埼玉県児玉郡児玉町教育委員会・児玉町史編纂委員会
菅谷浩之・坂本和俊　1975　「美里村長坂聖天塚古墳の調査」『第８回　遺跡発掘調査報告会発表要旨』　P15　埼玉考古学会
橋本博文　1976　「東国への初期円筒埴輪波及の一例と位置づけ―群馬県朝子塚古墳表採資料の解釈をめぐって―」『古代』第59・60合併号　P50～69　早稲田大学考古学会
橋本博文　1987　「埴輪の出現―関東地方の場合―」『季刊　考古学』第20号　P18～22　雄山閣出版
細田勝ほか　1984　『向田・権現塚・村後』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第38集　財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
前原豊ほか　1982　『Ａ１　堀之内遺跡群』　群馬県藤岡市教育委員会
間壁忠彦・間壁葭子・藤田憲司　1977　「岡山県真備町黒宮大塚古墳」『倉敷考古館研究集報』第13号　P1～55　倉敷考古館
増田逸朗・小久保徹ほか　1977　『塚本山古墳群』埼玉県遺跡発掘調査報告書第10集　埼玉県教育委員会

増田逸朗ほか　1981　『清水谷・安光寺・北坂』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第１集　財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
増田逸朗・坂本和俊ほか　1986　『埼玉県古式古墳調査報告書』　埼玉県県史編さん室
松島栄治・尾崎喜左雄ほか　1968　『石田川』
松田猛ほか　1985　『堤東遺跡』　群馬県教育委員会
美里町　1986　『美里町史』通史編　埼玉県児玉郡美里町
森　達也　1991　「東国における古墳出現期の一様相―多摩川と荒川流域を中心に―」『古代探叢』III―早稲田大学考古学会創立40周年記念考古学論集―　P317～334　早稲田大学出版部
山本　靖　1991　「関東地方における埴輪祭式の受容」『研究紀要』第８号　P65～99　財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
若松良一　1991　「天神山古墳」『古墳詳細分布調査報告書１』　P10～11　埼玉県教育委員会（埼玉県立さきたま資料館『調査研究報告』第５号（1992）に「古墳詳細分布調査　試掘・測量調査の報告」と題して再録されている。）
若松良一　1991　「根岸稲荷神社古墳」『古墳詳細分布調査報告書１』　P10～12　埼玉県教育委員会
若松良一　1991　「山の根古墳」『古墳詳細分布調査報告書１』　P13　埼玉県教育委員会

研究紀要　第10号

1993

平成5年12月20日　印　刷

平成5年12月25日　発　行

発　行　財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

〒369-01　大里郡大里村大字箕輪884

☎0493—39—3955

印　刷　朝日印刷工業株式会社